

染色の先覚者

稲畑勝太郎

明治十年十一月、京都府の留学生八名が、仏人レオン・ジュリーとともに横浜港を発った。この時の留学生派遣は、明治初より産業振興を進めた京都府が、当初の目的を達し、さらに一歩進んだ西洋技術の導入をめざしたものであった。したがって体系的な工業技術の習得こそがその狙いであったと考えられる。フランス学校や師範学校の成績優秀な生徒を選び、留学期間も六〜八年におよんでいることから、それは明らかである。

留学生の一人に稲畑勝太郎がいる。稲畑は後年、大阪商工会議所会頭を勤め、貴族院議員に選れているが、西洋の染色技術を体系的に修めた最初の人であった。

稲畑のフランス留学は八年におよんでいるが、ほとんどリヨンにあって染色技術の研究に費やされている。



リヨンの織物博物館

サン・バルテルミ学校、ヴェル・フランシユ工業学校、リヨン大学で研究を続ける一方、リヨンの大手染色工場であるマルナス工場で技術実習を修めている。一徒弟として夏は摂氏四〇度の灼熱の中で、シャボン液の滴る絹糸を運び、冬はローヌ河の水面に張りつめた氷を割って絹糸を洗い続けた。稲畑の成功者としての後年の素地は、この時の徒弟生活で培われたと考えられる。

帰国後は京都府勸業課に勤め、京都染工講習所の派遣講師として、西洋の染色技術を西陣を始め府下の染色業者に教えた。その後は京都織物会社の設立に関与し、自らも染色部長として活躍した

稲畑のもたらした黒染技術は、繻子黒染に生かされ、「都繻子」として脚光をあびた。さらに彼の考案した海老茶染は、明治期に流行した女生の袴地に生かされ、カーキ色の染法は、染色堅ろう度にすぐれ、軍用服地に使用され好評を得た。いずれも稲畑の長年にわたる研究の成果であった。

このように稲畑の事蹟を振り返る時、染色界の先覚者としての地位はゆるぎないものである。(福本武久)